HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	21世紀ケベックにおけるイヌイット文学とイヌー文学の魅惑的な出現 : 文学的事実についての方法論的再解釈
Author(s)	シャルティエ, ダニエル; 櫻井, 典夫//訳
Citation	55-77 多文化世界におけるアイデンティティと文化的アイコン : 民族・言語・国民を中心に Identity and Cultural Icons in a Multicultural World : Ethnicity, language, nation
Issue Date	2020-03-31
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/77226
Type	article
File Information	4.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

21 世紀ケベックにおけるイヌイット文学とイヌー文学の魅惑的な出現 文学的事実についての方法論的再解釈[1]

ダニエル・シャルティエ（ケベック大学・モントリオール校）
訳：櫻井典夫[2]

＜要約＞

世界中、とりわけ北方における文字で書かれた先住民文学の出現は、21 世紀の始まりを特徴づける出来事である。ケベックでは、イヌーとイヌイットに関する文学的事例の研究により、この現象が提起する歴史的・方法論的諸問題が把握されると同時に、イヌー文学とイヌイット文学を隔てる大きな違いも明確にされている。イヌー文学はケベック文学に近く、同じ文芸機関を共有しているのに対し、イヌイット文学は周極的な一つの全体（un tout circumpolaire）の一員として、ケベック文学とは距離を置く。両文学の特徴を際立たせるのは、文学の機能と用法（証言、癒し、知識の伝達）、認識の方法としての物語の重要性、自然との密接な関係といった諸要素である。ジョゼフィーヌ・バコン Joséphine Bacon、ナオミ・フォンテーヌ Naomi Fontaine、タムスィ・クマク Taamusi Qumaq、そしてマリ＝アンドレ・ギル Marie-Andrée Gill の作品を通じて、読者は、長らく過小評価されてきたファースト・ネーションズやイヌイットたちの社会と文化を発見することが可能になる。今日では世界的なものとなったこれら作家たちの成功は、ファースト・ネーションズやイヌイットに寄せられる関心の大きさを証明している。

キーワード：ケベック、文学、ファースト・ネーションズ、イヌイット、先住民

[1] この原稿は « La fascinante émergence des littératures inuite et innue au 21e siècle au Québec : une réinterprétation méthodologique du fait littéraire »というタイトルでフランス語バージョンが『ケベック研究』（日本ケベック学会 編）n° 11, 2019, p. 27-48 に掲載されている。

[2] 訳注は本文中［　］を用いて記した。翻訳にあたり、数々の質問に丁寧に返答してくださったシャルティエ教授に、また適切な助言をくれた友人のアイヌ研究者リュシアン＝ロラン・クレルクに、この場を借りて謝意を表したい。

ケベックにおける先住民文学の発展

フランス語における « autochtone »とは、原則的には「今も暮らし続けているその場所で生まれた者」のことである。しかし実際には、« Autochtones[3] »という言葉は「生まれた地に暮らし続けていること」に加え、「他民族、それも多くの場合他の大陸からやってきた他民族による植民地化の時代を経験したさまざまな民族」の呼称として用いられている。アメリカ大陸では、この用語は「ヨーロッパ人の到来以前に大陸に暮らしていたすべての部族（les nations）」を指すまでになっている。さらにその意味の拡張により、今日 « Autochtones »という用語は、ヨーロッパ、そして特にアジアにおける同様の事例にも適用されている。

今日のアメリカ大陸で「ファースト・ネーションズ« Premières Nations »」、「メイティ« Métis »」、「イヌイット « Inuits[4] »」と称される諸先住民は、ヨーロッパ人が到来する以前の歴史的先行性を示しているが、その先行性は消し去られてしまっていることが多い（例えば「新世界« Nouveau Monde »」、「アメリカ大陸の発見« découverte de l'Amérique »」、「建国« fondation »」などの表現は、プレ・コロンビアン時代の否-認識（non-reconnaissance）を示しているであろう）。

「先住民文化« cultures autochtones »」は長らく、放浪生活、自然や領土との統合的関係、伝統的習慣、そして多くの場合非ヨーロッパ系である先祖伝来の言語の実践等によってその違いが定義されてきた。また、多くの先住民部族に共通する政治・文化的状況は、意識の目覚めと共に権利の要求運動をもたらした。注意すべきはこれらの部族のほとんどが植民地化や、自分たちの信仰・習慣・文化・言語に関する沈黙の強制—それは「文化的ジェノサイド」へと通ずるものであった—、および人種差別を被ったという事実である。文化的領域において、これらの先住民族は一様にインフラの不備を訴えているが、それは多くの場合、教育機関（図書館[5]、資料館、博物館、高等教育を受けることの難しさ、など）に関するもので、その欠如や

---

[3] さまざまな先住民部族に属する人々を示す場合、大文字の « Autochtone » を用いることとする。

[4] 「名称自決 « auto-désignation »」の原則に則り、先住民の共同体自身が採用を決めた名称を用いてその共同体のメンバーを呼ぶことが適当である。それゆえ今日では「イヌイット」（かつてのエスキモー）、「イヌー」（かつてのモンタニェ族）などの呼称が用いられている。さらに、ケベック州議会（Assemblée nationale du Québec）で先住民の地位と権利に関する原則（1983 年）並びに先住民諸部族とその権利の承認に関する動議（1985 年）が採用されたことで、今日では、同一の領土（この場合はケベック）に 12 のネーション（12 nations）が暮らしていると認めることが習慣となっている。すなわち、ケベコワ（Québécois）、イヌー（Innus）、イヌイット（Inuits）、クリー（Cris）、ヒューロン＝ウェンダット（Hurons-Wendats）、アベナキ（Abénaquis）、アルゴンキン（Algonquins）、アティカメク（Attikameks）、マレシート（Malécites）、ミクマック（Micmacs）、モホーク（Mohawks）そしてナスカピ（Naskapis）である。

[5] 例えば、ヌナヴィクには今日もなお公共図書館が存在していない。

不足が問題となっている。先住民文化のほとんどは最近まで口承によって伝えられていたため、文字を用いた文学は、今日実践されているとはいえ、いまだ馴染みの薄い形式とみなされている。ほとんどの先住民文化は 2 国語を用いる言語的文脈に置かれているが、そのことが自言語の教育、伝達、そして時にはその存続そのものを危うくしている。自言語使用の乏しさは、結果として、翻訳と出版の積極的な取組を困難なものにする。さらにまた、先住民の作家たちは、自部族の言語に精通しているか、あるいはそれを知らないかによって、微妙な立場に置かれることにもなる。

フランス体制（Régime français）の時代よりこの方、ケベックにおけるフランス人と先住民の関係は曖昧な仕方で織りなされてきた。いくつかの部族との間には[6]（例えばクルール・デ・ボワ（coureur des bois）[7]の存在を通じて）真正な関係が結ばれた。その一方で、イギリスとフランスのライバル関係が、ファースト・ネーションズにも影響を及ぼしている[8]。フランス人とイギリス人とのあいだにおける分裂は、今日も依然として感知することができる。例えばフランス人と同盟関係にあったイヌー（Innus）やアベナキ（Abénaquis）、ヒューロン＝ウェンダット（Hurons-Wendats）は、今日もなおフランス語圏の文化に近しく、それと結びついた文化的・文学的領域に容易に適応している。他方、言語学者・地理学者のルイ＝エドモン・アムラン Louis-Edmond Hamelin が「北方性 « nordicité[9] »」の観念の研究を通じて明らかにしたように、ケベックにはフランスやアメリカ合衆国、カナダとの関係とは別種の、「北方 le Nord」を重視した文化的関係も存在している。「北方」とは、まずは主に先住民によって占められるケベックの「北方」であり、そしてラブラドール（Labrador）［カナダの大西洋岸にある地域］、グリーンランド（Groenland）、アイスランド（Islande）、北欧諸国（pays nordiques）といった他の「北方」である。これら「北方」に向けられる新たな眼差しによっ

---

[6]たとえばフランスとファースト・ネーションズとの相互関係を、表現の観点から口承性を介して説明した驚くべき書物、*Éloquence indienne* (Vachon, 1968) を見よ。

[7]「クルール・デ・ボワ」はケベックの想像界における重要な形象の一つである。広大な地域を巡って毛皮を集めることを生業としたこの男たちは、ヌーヴェル・フランスの時代からファースト・ネーションズと関係を結び、ヨーロッパ人にとって未知の空間を駆け巡りながら、植民地開拓者と先住民のあいだの橋渡しのような役割を果たした。その勇敢さから、「クルール・デ・ボワ」は国の一地域に根を下ろし辛抱強く自分の領地を穿つ「入植者« colon »」とは対照的な存在とみなされている。

[8]これらの関係については *Le pays renversé. Amérindiens et Européens en Amérique du Nord-Est. 1600-1664* (Delâge, 1991 [1982]) を参照せよ。

[9]ルイ＝エドモン・アムランの仕事は「静かな革命（Révolution tranquille）」の時代から既に確固たるものであった。ここでは *Écho des pays froids* (Hamelin, 1996) と *La nordicité du Québec* (Hamelin, 2014) の二冊を取り上げておこう。

て、その内部で「土着性 « autochtonie »」が主要な役割を果たすような戦略地勢学的配置転換への道が開かれることになった。最後に、文学的見地よりすれば、21 世紀初頭における先住民文学の人気は「移住するエクリチュール « écritures migrantes »」 (1983-1999)と呼ばれる潮流に連なるものとみなすことができる。「移住するエクリチュール」は、アイデンティティと領土の問題を提起すると同時にケベック文学の境界の問い直しを促したが、それはまさに、現在、別の仕方で先住民文学が行っていることだからである。

イヌイットとファースト・ネーションズによる文字で書かれた文学の出現は、ケベックにおける新たな現象である。その現象はまず 1970 年代に民族学的な関心より生まれ、21 世紀以降は文学的関心によって支えられている。コート・ノール地域（Côte-Nord ）［ケベック州の地方行政区の 1 つ。セントローレンス川北部に位置する］のセツィル（Sept-Îles）における雑誌『リトラル *Littoral* 』の創刊は、まずは地域的なコンテクストにおいてイヌーの文学的貢献を強調するものであった。2003 年にロドニー・サンテロワ Rodney Saint-Éloi［ハイチ出身の作家、詩人、エッセイスト、編集者。ケベック文芸アカデミー会員。（1963 年―）］によってモンレアルに創設された出版社メモワール・ダンクリエ（Mémoire d’encrier）は、2008 年におけるイヌーの詩への関心を皮切りに［この年メモワール・ダンクリエからケベックとファースト・ネーションズの作家のあいだで交わされた書簡をまとめた「言葉を交わしましょう！*Aimititau ! Parlons-nous !* 」（Mémoire d’encrier, 2008) が出版されている］、先住民文学を民族学的コンテクストから解放し、その文学的な価値を強調している。2010 年にヒューロン＝ウェンダットの出版社アネノラク（Hannenorak）が創設されたこと、また 2011 年よりウェンダケ（Wendake）［ケベック州にあるヒューロン＝ウェンダットの保留地］でファースト・ネーションズの書籍の見本市（Salon du livre）が開催されていることは、今日ではファースト・ネーションズが自分たちの手で編集プロセスを担っていることを示している。ここ 10 年におけるジョゼフィーヌ・バコン Joséphine Bacon、ナオミ・フォンテーヌ Naomi Fontaine、ナタシャ・カナペ＝フォンテーヌ Natasha Kanapé-Fontaine の華々しい成功は、先住民文学の価値をケベックの文壇の中心にまで認めさせた。一方イヌイットの場合、出版は主にアバタック文化研究所（Institut culturel Avataq）とケベック大学出版局（Presses de l’Université du Québec）によって担われてきた。ケベックに生じた出版、文学、そしてそのアイデンティティを巡るこれら現象の重要性は、世間の注目を集め、世界的に認知されるところとなった。こうした現象は主に、それぞれ異なる様式で、イヌイットとイヌーとに関わるものである。以下、これら二つの先住民の現状を紹介する。

イヌイット

イヌイットは北極諸地方における最大の先住民族で、シベリアからグリーンランドにかけて広がる広大な領土に分散して生活をしている。今日では、継続的な三つの段階を経てイヌイットがアジアから移動してきたことが知られている。最初の移動の動きはパレオエスキモー（Paléoesquimaux）によるもので、紀元前 2500 年頃にアラスカからグリーンランドにかけて始まった。二番目はドーセット（Dorsétiens）たちの移動で、紀元前1000年頃に開始した。最後の段階は、今日のイヌイットの祖先にあたるチューレ（Thuléens）の移動で、それは紀元1000 年頃にアラスカからカナダ東部にかけて行われた。ケベックにおいて、ヌナヴィクのイヌイット（Inuits du Nunavik）、今日の彼らの自称に従うのであればヌナヴィミウート（Nunavimmiut）が、ケベックの領土の三分の一、およそ 50 万㎢を占める領域で、かつてヌーヴォー・ケベック（Nouveau-Québec）やウンガヴァ（Ungava）とも呼ばれたヌナヴィクに定着したのはこの時代のことである。すべてのイヌイットおよそ 15 万人は一つの共通語を有しているが、この言語は地域ごとに大きく変化する（この変化には、英語、フランス語、デンマーク語、ドイツ語などヨーロッパの諸言語の影響も関係している）。グリーンランド（カラーリット・ヌナート（Kalaallit Nunaat）［グリーンランドの本国での呼称。「人間たちの地」の意］とも呼ばれる）におよそ 55,000 人、（ラブラドール地方の）ヌナツィアヴート（Nunatsiavut）に 2,500 人、（ケベックの）ヌナヴィクに 15,000 人、ヌナヴート準州（Nunavut）［ノース＝ウエスト準州の中部および東部に住むイヌイットによって創り出された準州。総面積はカナダの国土全体の 5 分の 1 に相当する］に 35,000 人、ノース＝ウエスト準州（Territoires du Nord-Ouest）のイヌヴィアルート（Inuvialuit）に 4,000 人、アラスカに15,000 人、そしてシベリアにおよそ 2,000 人のイヌイットがおり、残りのイヌイットはより南方の諸都市（主にモンレアル、オタワ、ウィニペグそしてコペンハーゲン）に分散して暮らしている。今日、ケベックのイヌイットの 95％以上がイヌクティトゥット語（l’inuktitut）を常用の言語としている。若者たちはまずこの言語で学び、次いでフランス語か英語を選択することになる。若者たちの半分以上はフランス語を選ぶが、このことが、ヌナヴィクのイヌイットを北極地方で３言語（イヌクティトゥット語、フランス語、英語）を話す唯一の民族とし、それは当然その文学にも大きな影響を及ぼしている。

イヌイットは、世界で最も過酷な気候条件への巧みな適応と抵抗とで知られている。確かにジャーナリストのアヌ・ペルアス Anne Pélouas がいうとおり「今日のイヌイットは狩猟、漁撈、採集について確固たる伝統を保っている(Pélouas, 2015, p. 12) 」とはいえ、イヌイットはこれまで幾度となく生活様式の修正を迫られてきた。その主な原因は植民地化と気候変動に直面したことに求められる。ケベックにおけるイヌイットの民間組織は、西洋国家（ここではカナダ連邦政府とケベック州政府）と先住民部族のあいだに結ばれた初の現代的条約「ジ

ェームズ湾および北ケベック協定 *Convention de la Baie-James et du Nord québécois*[10]」に則って管理されている。

「先住民」ではありながら、イヌイットは自分たちがファースト・ネーションズやメイティとは異なる存在であると主張し、特別な地位の要求を積極的に行っている。イヌイットがそのように主張する理由はさまざまである。まずイヌイットはファースト・ネーションズよりも遅れてアメリカ大陸にやってきたという歴史的な事情がある。また、イヌイットの言語が他のどの先住民族とも共通の根を持たないという事情もある。さらに、カナダの政治的文脈でいうならば、イヌイットはかつて一度も「インディアン法 *Loi sur les Indiens*」［1876 年に制定された先住民政策の指針となる法律。土地に関する条約を締結した先住民は公認インディアンとなり、それ以外は非公認インディアンとされた］の下に置かれなかったという事情もある。こうした理由から、イヌイットは今日でもファースト・ネーションズと協力するよりは、それとは分離した諸機関（アバタック文化研究所、カティビク教育委員会（Commission scolaire Kativik）、マキビク・コーポレーション（Corporation Makivik）［ジ ェームス湾協定のためにイヌイットに支払われる補償金などを受け取り、管理し、運用するヌナヴィク・イヌイットの非営利団体］など）を組織することを好んでいる。とはいえ、イヌイットもファースト・ネーションズも共に、植民地化とそれに続く脱植民地化運動の中で同様の政治的課題に直面していることに変わりはない。その点、1999 年のヌナヴートにおける自治準州の創設はイヌイットとファースト・ネーションズの違いを見事に象徴するものであった。成功に終わったこの土地返還要求のプロセスは、イヌイットの交渉能力と利害調整能力とを示している。一方ケベックでは、「協定」締結後、土地返還の要求プロセスは一向に進む気配がない。ヌナヴィクに地方政府を創設することを目指して 2011 年に行われた住民投票は、その地域に住む 66％のイヌイットの反対にあって否決され、後には分断化した民間組織が残されることになった。

このように、イヌイット社会では脱植民地化に向けた政治的な進展が見られはするものの、ファースト・ネーションズが体験したのと同様のヨーロッパからの諸影響—社会的システムの押付け／これまでとは異質の政治・経済／新たな病気の発生／伝統的文化の放棄／教育・収入・公共サービスにおける極度の不平等／文化的喪失感／社会的・家族的な問題の増加、とりわけ暴力と自殺—が消えたわけではない。幸いにもイヌイットは、その適応能力のためにこうした急激な変化に対してもポジティブな反応—イヌイットの協同組織の創設／彫刻、石版画、記述行為、歌、映画、電子メディアといったさまざまな伝播様式への文化的適応／言語の回復能力—を見せることができた（参考までに、ヌナヴィクに最初の連邦学校が建てられたのは 1950 年代になってからであることを付記しておこう）。

---

[10] このテーマに関しては Regard sur la Convention de la Baie-James et du Nord québécois (Gagnon et Rocher, 2002)を見よ。

周極空間全体は—それがローランティッド地域（Laurentides）［モンレアルの北部に位置するケベック州の地方行政区の一つ］やノルウェー北部、北海道[11]、シベリアやヌナヴィクのような連続的拡張であろうと、フェロー諸島やグリーンランド、あるいはアラスカの場合のような外部への拡張であろうと—南から北極へと向かう政治・文化的拡張と、多かれ少なかれ自治的で独立した行政組織の確立によって特徴づけられる。つまり北極地方の総体は植民地的空間であるということができる。それというのもこの地域全体が「南方 le Sud」の需要（エネルギーや資源など）に応じて管理され、制御されているためである。イヌイットの場合、こうした状況が彼らのアイデンティティを複雑なものにしている。地域的なイヌイットのアイデンティティ（ヌナヴィクの、グリーンランドの、など）が支配的になりすぎた結果、彼らのアイデンティティが周極の団結による「汎イヌイット« pan-inuit[12] »」形成の欲求や、自身が帰属している国家（カナダ、アメリカ合衆国、ケベック、デンマーク）への愛着とのあいだで競合状態に置かれることも珍しくない。

ヌナヴィクの場合、今日その政治的関係は主にケベック州政府とのあいだに結ばれ、カナダの連邦政府との関係は副次的なものに留まっている。しかし、ヌナヴィミウートのアイデンティティは、彼らの暮らす地域の現状と深く結びつき、どちらかといえばカナダへの愛着に傾いている。ヌナヴィクは人口の大幅な増加とともに目覚ましい文化的開花を遂げたものの、インフラの発達が人口の増加に追いついておらず、そのため社会上、教育上の大きな問題が生じている。ヌナヴィクとそれ以外のケベックの地域の結びつきは依然として稀薄なままであるが、その主な原因は、陸路の欠如、法外な空輸料金[13]、インターネット回線の不足などに求められる。イヌイットとケベック南部の人々のあいだにおける、文化的、社会的、そして対人関係は、明らかに欠如しているのである。

書籍となって出版されているイヌイットの文学作品はほとんどない。定期刊行物や新聞を掘り起こし、北極地方で重視される表現形式を包含するために文学の定義を広げることで、さらにいくつか見つかる程度である。とはいえ、イヌイットの文学作品は現代における魅惑的で極度に複雑な事例である[14]。そこには、次々と現れる口頭表現と筆記表現の集合体（スポークン・ワード（*spoken word* ）［歌詞、詩、物語を「歌う」というよりは「話す」、文学の芸

---

[11] この場合、領土を群島とみなす必要がある。

[12] これらの概念とイヌイットに対するその影響については拙稿 « “Pan-Inuit” Written Heritage. Institutions, Goals, Projects, Perspectives » (Chartier, 2017a) を見よ。

[13] この事実を示す一例：エア・イヌイット利用でモンレアルとイヴィュヴィックを一往復した場合、航空券の値段は 2019 年現在平均 3500$ である。

[14] このテーマに関しては私がネリ・デュヴィック Nelly Duvicq と執筆した論文、« Un aperçu de la littérature inuite du Nunavik » (Chartier et Duvicq, 2014) を見よ。

術、または芸術的パフォーマンス］やジュット・オラル（joutes orales）［参加者が雄弁の才を競う戦い］などの現代的産物も考慮するのであれば、その勢いはこの先も衰えることはないであろう）のなかで、文学のあらゆる拡散形式（特にデジタル）が競合している様が見てとれる。イヌイット文学は、通常私たちが文学制度（l'institution littéraire）[15]を考察するために用いる理論的根拠の大部分について、その再考を促しているのである。

ヌナヴィクの作家によって書かれ、出版された作品は多くはない。筆記の形式が現れたのは 20 世紀半ばになってからのことで、それはまず新聞や定期刊行物の中に、次いで 21 世紀に入るとデジタル出版の場でも散見されるようになった。このような事情から、今日もまだ書かれたものの中に口承の痕跡が、時に思いがけない形で見つかるとしても驚くにはあたらない。イヌイット文学は、おそらくそのコーパス内で最も興味深い作家であるタムスィ・クマク Taamusi Qumaq のそれのように[16]、生活の物語（集団のために個を超えた生活様式を存続させる方法とみなされるもの）を特徴とする。さらにイヌイット文学の中には政治的な発言に向けたテクストも存在する。こうした発言は、抵抗運動（Nungak, 2019 [2017]）や、今日では火急の問題となった気候変動との闘いに着想を得ている。後者の例としては、文化的・フェミニズム的観点からこの問題を扱ったシラ・ワット＝クルーツィエ Sheila Watt-Cloutier のエッセー『寒さへの権利 *Le droit au froid*』を挙げることができる。

イヌイット文学は、複数言語の共存とその交錯的な使用（ヌナヴィクの場合[17]、イヌクティトゥット語と英語とフランス語）がなされる中、明確な都市的中心地を持たないまま地域ごとの現実に深く根を下ろし、太古から続く文化の深みを汲み入れながら、周極のイヌイット世界の総体から成る大きな全体との関連において形成されている。この世界は今日、未だに残る植民地時代の影響と[18]、時に論争の種ともなる「汎イヌイット」的団結への欲求のあいだで

---

[15] ジャック・デュボワ Jacques Dubois、ピエール・ブルデューPierre Bourdieu、そして *La vie littéraire au Québec* (Presses de l'Université Laval) のプロジェクトによって提示された観点による。

[16] *Je veux que les Inuit soient libres de nouveau. Autobiographie (1914-1993)* (Qumaq, 2009).

[17] ヌナヴートのイヌイットの文学史については *Stories in a New Skin. Approaches to Inuit Literature in Nunavut* (Martin, 2012) を、ヌナヴィクのイヌイットの文学史については *Histoire de la littérature inuite du Nunavik* (Duvicq, 2019) をそれぞれ参照せよ。

[18] 完全無欠な脱植民地運動が存在すると信じられるかもしれないが、現実はもっと微妙で、時にそれは矛盾する。例えばズィヴィディ・ヌンガクのエッセー、*Contre le colonialisme dopé aux stéroïdes. Le combat des Inuit du Québec pour leurs terres ancestrales* [*Wrestling with Colonialism on Steroids. Quebec Inuit Fight for Their Homeland*] (Nungak, 2019 [2017]) を見よ。このなかでヌンガクは、ケベックの政治的圧力を告発しているが、連邦政府の政治的圧力に対して同様の運動をすることは拒んでいる。この点ヌンガクはタムスィ・クマクとは対照的である。タムスィ・クマクはルネ・レヴェックに友情を抱き、ケベックのために行う彼の政治活動を賛美したのであ

極度の緊張状態に置かれている。外部から、そして古代ヨーロッパの伝統に従いながら、イヌイット文学は独特のメッセージを、つまり、もっとも過酷な条件下における人間の創意工夫や生存に向けた能力についてのメッセージを送っている。フランスの哲学者ミシェル・オンフレ Michel Onfray が述べているように、ヨーロッパ人はイヌイットの中に苦行のモデルを見出す。ヨーロッパ人が「文化的に *culturellement*」到達することを目指したある段階にイヌイットは「自然に *naturellement*」到達したとみなされているのである[19]。イヌイットの形象に関するこうしたロマンティックな見解については議論の余地が残るだろう（西洋の歴史の中でイヌイットの形象が辿った行程が、ときに侮蔑的ときに美称的と言った具合に非常に込入ったものであることを考えればなおさらである[20]）。しかしいずれにせよ、その分量は微々たるものでありながら、イヌイット文学が世界的な文化遺産であることに間違いはない。

ケベック文学の境界を含むイヌー文学とは対照的に、ヌナヴィクのイヌイット文学はマイナーではあるが一個の独立したコーパスとしてケベック文学とは明らかに一線を画している。この状況はイヌイット文化の周極的特徴によって部分的に説明されるが、編集と出版に用いられる言語のことや、イヌイットの作品が共同体や大学もしくは民族学の叢書から発行されているという事実（これに対してイヌー文学はケベック人によって書かれた作品と同じ出版社から発行されている）、あるいはイヌイットの作家間における地理的な隔たりが、ニタシナン地域（Nitassinan）［カナダ東部のケベックとラブラドールにまたがるイヌーの居住地域。イヌー＝アイムン語で「わたしたちの土地」を意味する］のジョゼフィーヌ・バコン、ナタシャ・カナペ・フォンテーヌ、ナオミ・フォンテーヌらと同様のメディアによる伝播を不可能にしている事実なども考慮しなければならない。

る。またグリーンランドでは、デンマークの価値観からの分離活動が拒絶と賛美のあいだで同様の進展を続けている。このことが植民地関係の複雑な性格を証言している。

[19]「古くより、存在をめぐる哲学の目的は、その極において直接的な確実性をもって働くもの、つまり唯一必要なものへの集中、余剰物の一掃、潜在的な満足感に対する欲求の縮小、欲望とやむを得ない現実とを見極めること、禁欲的理想のモデル、快楽の放棄に対する情熱とわずかなもので満足すること、自然の中で薫陶された道徳などを実現することとされてきた。西洋哲学が、豊かさの論理への反動として文化的に提示してきた倫理的喜びを、イヌイットは自然に味わっている」(Onfray, 2002, p. 73-74.)

[20] このテーマについては « “Au-delà, il n'y a plus rien, plus rien que l'immensité désolée.” Problématiques de l’histoire de la représentation des Inuits, des récits des premiers explorateurs aux œuvres cinématographiques » (Chartier, 2005)と題された拙論を見よ。

イヌイット文学は何よりも、認識の様式と知識の伝達の様式としての物語に関心を寄せている[21]。カナダ初のイヌイット小説とされる『狩猟者の銛 *Le harpon du chasseur*』の中で、マルクシ・パツァウク Markoosie Patsauq（ヌナヴィク出身）は彼自身が文学の役割とみなすことについて述べている。作中人物であるカミック Kamik を通じて、作者は物語（récit）、叙述（narration）、小話（conte）や伝説（légende）が日常生活との連続体の内部に組み込まれていること、さらにそれらは出来事を追体験し、その新たな伝達を可能にすることを想起させるのである。イグルーに戻ると、カミックはその日体験したことを家族に話して聞かせる。物語を終えると、疲れ果てた様子でカミックは引きこもってしまう。「いったいカミックに何があったのかしら？」と、カミックの母オーラミック Ooramik が尋ねる。すると別の登場人物がオーラミックに応える。「カミックは私たちに語りながら、体験した試練のすべてを再び生きなおしたのだ」と。

イヌイットの作品のほとんどが「他者 l'Autre」との関係を扱っている。忽然と現れた文学、脱植民地的で他の文化とも結びついた文学としてのイヌイット文学は、植民地化による対立関係から生じた全ての文学に共通する不快感、葛藤、便法を表現している。作品内に響く声は、同胞に話しかけようとする意志（生き延びること）、同胞の名において語ろうとする意志（自分たちを守ること）、借り物の文化形式を用いて他者に語ることを受け入れる意志（適応すること）、そして何よりも、不公平で不当な状況から抜け出そうとする意志（反抗すること）を伝えている。こうした声の働きの前では、社会から外れたり、そこからずれたりした個人の声に残された場所はほとんどないのであるが、これと同様の状況はイヌイット社会の外にも見出すことができる[22]。

ヌナヴィクの文学の場合、他者との関係を説明する三つの事例が挙げられる。タムスィ・クマク、ズィヴィディ・ヌンガク Zebedee Nungak 、そしてジョニ・イュータンガク Johnny Uitangak についての事例である。タムスィ・クマクは独学の作家で、イヌクティトゥット語のみを使用した（これは 2 国語併用によって特徴づけられる先住民の文脈にあっては珍しいことである）。クマクは、イヌイットの言語に対する自らの知識（彼は最初の辞書を編纂

---

[21] これが他の先住民文学にも当てはまることは、*Nous sommes des histoires. Réflexions sur la littérature autochtone* (Jeannotte, Lamy et St-Amant, 2018) という美しい名を持つ選集の中でも述べられている。マリ＝エレーヌ・ジャノット Marie-Hélène Jeannotte、ジョナタン・ラミ Jonathan Lamy そしてイザベル・サン＝タマン Isabelle St-Amand によって名づけられたこの選集は、文学に関する先住民の理論的提案をまとめたものである。

[22] 早くも 1975 年に、フェリクス・グァタリ Félix Guattari とジル・ドゥルーズ Gilles Deleuze は、「マイナー« mineure »」と呼ばれる文学が必然的に政治的であり、したがって集団的であることを認めていた。 (Deleuze et Guattari, 1975).

した[23]）と、イヌイットの世界を襲った激変についての自身の見解を（自伝の執筆を通じて）伝達しようとした。彼の作品を通じて、ハドソン湾の小さな村から眺められた 20 世紀の変化の総体（映画、戦争、学校、政府、社会事業、外国語の到来）と、そうした変化を受け入れるか、あるいはそれに抵抗するかといったイヌイットの反応を辿ることができる。クマクは外的な圧力が自文化に及ぼした影響を認めながらも、イヌイット特有の適応の伝統に則り、自分のもとに押し寄せてきた思考様式を即座に受け入れる。後に彼の友人となるルネ・レヴェック René Lévesque［ケベック州のジャーナリスト、政治家で 1976 年から 85 年まで州首相を務めた（1922-1987）］との出会いを通じて、言語と文化は互いに異なるものの、それらを守ろうとしている点において二人の目的が同じであることをクマクは理解する。そのことが彼の自伝のタイトル『私はイヌイットが再び自由であることを望む *Je veux que les Inuit soient libres de nouveau*』の由来となっている。最初の商人たちの到来を前にクマクはイヌイットのための協同組合を設立する。書かれたテクストの永続性を理解した後には、クマクは狩猟の銛を捨て、それによって不安定な状況に身を置くことを十分に意識しながらも、書くことに専念する道を選ぶ。

ズィヴィディ・ヌンガクの作品は、ヌナヴィクのイヌイットと「他者」との対立関係を主なテーマとしている。ヌンガクは「他者」をイヌクティトゥット語の単語「カルナート « qallunaat »」に結びつけるが、この単語はときには「白人« le Blanc »」、ときには単に「他者« l'Autre »」として定義される。ヌンガクは主にその政治時評のなかで、戦闘的論調と共に痛烈な皮肉と風刺とが刻まれた、そして時に「カルナート」ばかりでなくイヌイット自身をも揶揄するような効果的な表現を磨き上げた。彼の作品は、脱構築を目的に「他者」の概念に働きかけるという点において[24]、ヌナヴィクにおける「ポストコロニアル« postcoloniale »」とも呼びうるような知的抗争の始まりを告げている。コメンテーター、言語学者、そして脚本家としてのヌンガクの主眼は、イヌイット文化に向けられる民族学的視点を覆すことにある。その好例が『カルナート！なぜ白人はおかしいのか　*Qallunaat! Why White People are Funny*』(2006)と題された映画である。その中でイヌイットたちは「白人研究センター」を設立するのであるが、これはイヌイットが学者たちによって最も研究されてきた民族の一つであることに対する目配せである。ヌンガクは 2017 年に自分の意見を一冊の本にまとめた（フランス語への翻訳は 2019 年）。そのタイトル『ステロイドで増強された植民地主義に抗して—先祖伝来

---

[23] *Inuit uqausillaringit / Les véritables mots inuit. Un dictionnaire des définitions en inuktitut du Nunavik (Québec arctique)* (Qumaq, 1991).

[24] ズィヴィディ・ヌンガは、その作品が大学の論文のテーマに選ばれた数少ないイヌイット作家のひとりである。その論文とはクララ・モンジョン＝ボルボネ Clara Mongeon-Bourbonnais, « La figure du *Qallunaat* : Zebedee Nungak et la prise de parole inuit » (Mongeon-Bourbonnais, 2014) である。

の土地のためのケベックのイヌイットの戦い *Contre le colonialisme dopé aux stéroïdes. Le combat des Inuit du Québec pour leurs terres ancestrales*』には、政治を転覆しようとするヌンガクの意志が明確に表現されている。

クマクやヌンガクとは対照的に、ジョニ・イュータンガクは、文化の存続という文脈の中で現在のイヌイットの要請に応えることを目的に執筆を行っている。私たちの知る「現代文学« littérature contemporaine »」の概念に反するという点において、イュータンガクの作品は私たちに文学ジャンルについての問い直しを迫るものである。彼の作品を読むと、私たちの知る文学形式を用いてイヌイットが文学とみなすものを囲い込むことができるかどうかを自問せずにはいられない。イュータンガクは何点かの文学作品を出版しているが[25]、特に重要なのは『パナク［氷切り用のナイフ］*Panak*』と題された一冊の書物である（英語版は *The Snow Book*）。それはいわば寒さと雪の中での「生存の手引き« guide de survie »」といったもので、イュータンガクはそれをインターネットで配信した。イュータンガクによれば、この手引きは社会的・文化的な緊急事態に応じる目的で書かれたものである。その緊急事態とは、領土に関するイヌイットの知識を伝えていくことであり、それが重要なのは、認識の方法やイヌクティトゥット語にも関わることだからである。強制的な移住や、意志によらない家族の離散を体験したことで、イュータンガク—彼自身イグルー作りの名人でもある—は、彼が用いる文学の形式こそが今日のイヌイット社会の状態に最も相応しいものと考えるに至った。インタビューで彼は以下のように答えている：

> わたしの同胞たちはできるだけ早くこの本を読む必要があります。彼らのほとんどは雪についての知識がなく、雪に対してどう振舞ってよいのかを知りません。自分が暮らす領土全体をまるで自分の手の平のように知る術を学ぶこと、雪を知る術を学ぶこと、この二つは世界でもっとも単純なことでありながら、それを熟知するためには断固たる決意を必要とします[26]。

クマク、ヌンガク そして イュータンガクの事例は、ヌナヴィクのイヌイット文学が現在辿っている道筋を三様の仕方で示している。イヌイット文学は、時に我々の考えが及びもしない選択肢に依拠しながら、イヌイットの社会に固有のさまざまな要請に応じているのである。外部からイヌイット文学を見つけるのは簡単ではない。それは定期刊行物の中にちらほらと、

---

[25] とりわけ、彼の出生地であるプヴィルニトゥック（Puvirnituq）の物語。このテクストはインターネット上でしか発信されていない (Uitangak, 2013)。

[26] E メールによるジョニ・イュータンガクとのインタビュー (2013) をフランス語に意訳したもの。

あるいはイヌクティトゥット語や非公式なネットワークで発信される出版物の中に見出される程度である。それでもイヌイット文学は、ほかのどの経路からも届かない声を私たちに届け、独特な世界観を伝えている。イヌイットと領土を分かち合う機会に恵まれたケベックでは、そのことが文化とアイデンティティ、そして文学に関するいつくかの見解を見直すための機運につながっている。ただしイヌイット文学は、ケベックの文学（littératures du Québec）の一部でありながら「ケベック文学« littérature québécoise[27] »」とは別のコーパスを形成している。これに対し、イヌー文学の場合事態はより曖昧である。

イヌー

かつて「モンタニェ族 « Montagnais »」と呼ばれたイヌーは、ケベック＝ラブラドール半島（la péninsule Québec-Labrador）東部の、彼らがニタシナン（Nitassinan）と呼ぶ領土に暮らす先住民族である。「イヌイット」という言葉と同様に、「イヌー」という言葉も単に「人間」を意味する。イヌーは 13 のコミュニティーに別れて暮らしており（そのうちの 11 がケベックに存在する）、23 000 人の人口を数える。彼らの言語であるイヌー＝アイムン語（l'innu-aimun）は、衰退や消滅の危機に瀕しながらも、今日もなおその命脈を保っている。ナオミ・フォンテーヌやジョゼフィーヌ・バコンを筆頭にイヌーの女性作家の名が広く知られたことは、ケベックにおける先住民族文学の出現を告げる出来事であった。

イヌー文学は作家と出版社によってはイヌー＝アイムン語とフランス語の両方で書かれ、出版されている。地域の文化がより広大な周極のイヌイット全体との関係の下で位置づけられるヌナヴィクのイヌイットとは異なり、イヌーはケベックの領土とラブラドール地方、つまりニタシナンを除いては暮らしていない。先住民文化と先住民文学の世界的潮流の一部をなしながら、イヌーは自分たち以外に自文化を守れるものがいないことを自覚している。彼らは世界のほかの場所からイヌーの援助を期待することができないのである。

イヌー文学は女性のみによって担われている。1976 年にアヌ・アンタン・カペシュ An Antane Kapesh の書いた最初の本が出版されてから今日に至るまで、文学的テクストを出版した男性は一人もいない。イヌーの男性が活躍するのは主にシャンソニエ［時事的なテーマをもとにパロディー風の曲や寸劇を作ったり、即興で演じたりする人］としてである。イヌー文学は主に詩の形式で書かれている。イヌー文学は国内のみならず国際的にも大きな成を収めたが、そのことはケベック文学一般だけでなく、ケベック文化内での先住民の重要性についての認識

[27] 文学とは総じて言語と密接に結びついた概念である。「ケベック文学« littérature québécoise »」とは、フランス語で書かれたケベックのネーションのコーパス（corpus national）として定義される。しかしながら他の文化圏にとってと同様、ケベックにとっても同一の領土に異なる文学が個別に存在していると認めることは、差異を評価し、多様性に価値を与えることへとつながる。

にも影響を及ぼした。イヌー文学を読むことで、読者はイヌーの置かれた状況やものの見方、イヌーの文化やイヌーが渇望していることなどを、その内側から理解することが可能になる。イヌー文学は、まずは雑誌『リトラル』によって、次いで出版社メモワール・ダンクリエによって支えられているが、これに比肩しうる文学はケベックのほかのどのファースト・ネーションズにも存在しない。唯一、ヒューロン＝ウェンダットのみがこれと同量の作品を含むコーパスを有しているが、イヌー文学ほどの成功を収めてはいない。

イヌー文学が認知されたことにより、ケベック文学の中（あるいは外）におけるイヌー文学の位置づけを巡る問題が、間接的に提示されることになった。制度上の観点からみれば両者は同じ言語だけでなく編集と批評のための機関も共有しているが、こうした共存は、州議会（Assemblée nationale）から個別の「ネーションズ« nations »」として認められた複数の集団によって担われるこれらのコーパスについて熟慮する必要があることを示している。文芸批評の観点からみると、時に暴力的な形で露わになる「文化の盗用 « appropriation culturelle »[28] 」と照らし、ネーションのコーパス（corpus national）の境界を吟味することが求められているのである。ケベック文学の進展の中で、先住民文学はそれに先行する「移住するエクリチュール」と形式上の諸特徴（アイデンティティおよび記憶、出自、トラウマとのつながりの重視／自伝の重用／ジャンルの並置）を分かち合い、文学史的な連続性の内部にしっかりと組み込まれている[29]。しかしながら、イヌーの作品群の首尾一貫したまとまりと、新たなコーパスの出現にはつきものの（作家間でなされる反復、参照、借用などによって表現される）「伝統の創作 « invention d'une tradition[30] »」の効果を考慮するのであれば、このコーパスをどう呼ぶかについて慎重にならざるを得ないだろう。脱植民地化の過程における命名の問題は特に繊細であるだけになおさらである。

ここ 40 年におけるイヌー文学の進展を象徴するのは六人の女性である。それぞれの生まれた場所（領土内、あるいは保留地内）、母語、教育、社会的関与などを考えあわせると、彼女たちの活動を、もっとも伝統的なものからもっとも現代的なものへと至る一つの系列とみ

---

[28] 2018 年 7 月に公演中止となったロベール・ルパージュ Robert Lepage とアリアヌ・ムシュキヌ Ariane Mnouchkine の劇作品『*Kanata*』に関するメディアの加熱はこの問題を巡る緊張の大きさを露呈させた。

[29] このテーマについては拙論« La réception critique des littératures autochtones. *Kuessipan* de Naomi Fontaine » (Chartier, 2017b) を見よ。

[30] ケベックの文学史家アンドレ・ヴァション André Vachon の表現を借用したもの。アンドレ・ヴァションは、この伝統の創作のなかに、あるメカニズムを認めていた。そのメカニズムに従って、未成熟のネーションの文学（littérature nationale）は「他のネーションの« étrangères »」の作品ではなく、自分たちのネーションの先行作品を参照しながら独自の空間を作り出す作業を開始するのである(Vachon, 1968)。

なすことができる。最初のイヌー作家であるアヌ・アンタン・カペシュは、1926 年にクージュアック（Kuujjuaq）［ヌナヴィクの大きなコミュニティーで、ウンガヴァ湾に注ぐコクソアク川を河口から 50 km ほど遡った西岸に位置する］の近くのツンドラで生まれた。彼女はそこで、狩猟と漁撈についての伝統的な教育をイヌー語で受けたが、それは 1953 年にセツィル近郊のマリヨテナム（Maliotenam）［ケベック州コート＝ノール地域のセット＝リヴィエール郡に存在］に保留地ができる以前のことであった。したがって彼女は西洋式の学校に通ってはいない。1965 年、彼女はマツィメコシュ（Matimekosh）［セツィルの北およそ 510km に存在するコミュニティー］のイヌー部族の長となり、1976 年までその任を務める。カペシュの作品は政治的で、彼女の政治参加の延長に位置づけられる。1976 年に「わたしは呪われ指弾された未開女である *Je suis une maudite Sauvagesse / Eukuan Nin Matshimanitu Innu-Iskueu*」と題された小冊子が発表されたが、その中でカペシュは、自らの文化を擁護するとともに、イヌーが耐えてきた社会的問題と不正を告発し、さらに自民族が歴史の上で被った土地の剥奪を物語る。この本はその後、1982 年にパリの出版社エディション・デ・ファム（Éditions des Femmes）から再版されることとなった。1979 年に発表された 2 冊目の本『わたしの国に何をした？*Qu'as-tu fait de mon pays?*』においても、カペシュは同様の仕事を継続する。この書物の中でカペシュはイヌーの領土が占領される様子を描写したのである。このようにアヌ・アンタン・カペシュは論争的で社会的な作品によって道を切り開いたのであり、その作品はジョゼフィーヌ・バコン、ナタシャ・カナペ・フォンテーヌ、ナオミ・フォンテーヌなど、後続する作家の行動の指針ともなっている。このうちナオミ・フォンテーヌはカペシュをテーマに修士論文を執筆し、2019 年にカペシュの作品が再版された際にはその序文を書いてもいる。カペシュは 2004 年にセツィルでその生涯を終える。

リタ・メストコショは 1966 年にアーブル＝サン＝ピエール（Havre-Saint-Pierre）［ケベック州、コート・ノール地域の地方自治体］近郊のイキュイナンニツィット（Ekuanitshit）保留地で生まれた。彼女は両親からイヌー＝アイムン語を習ったが、教育を受けたのはケベックのモンレアルとシクティミ（Chicoutimi）［ケベックのサグネーラック＝サン＝ジャン地域にある都市サグネの三つの区域の一つ］においてである。カペシュと同様、メストコショの作品[31]も政治的で、イヌーの文化と言語を守ることを目指している。彼女はコミュニティーの評議会の一員であり、そのスポークスマンのような活動をしている。あるインタビューの中で彼女はこう述べている。「わたしたちの暮らす伝統的な土地は今日もなお、巨大な森林会社や水力ダムによる破壊と鉱山とに脅かされています。わたしたちの生活と生存は、川や森、そして湖と不可分なのです（(Premat et Sule, [発表年月不明])）」彼女は自らの文化を擁護するため

[31] 彼女は最初の選集 *Recueil de poèmes montagnais* を 1995 年にマストイヤッシュで出版した。

に伝統的な詩を発表している。メストコショの名は、フランスの作家ジャン＝マリ・ギュスターヴ・ル・クレジオ Jean-Marie Gustave Le Clézio が 2008 年に行ったノーベル賞受賞講演の中でも引用されている。ル・クレジオは、詩の世界におけるもっとも偉大な声の一つとしてメストコショを讃えたのである。リタ・メストコショは、文学を通じて、世界中にイヌーの政治的メッセージを届けることに成功するとともに、イヌー文学を広く知らしめることにも貢献した。彼女の作品は 2010 年にル・クレジオの序文とともにスウェーデン語に翻訳されている。

1947 年、ペッサミット（Pessamit）［ケベック州コート・ノール地域マニクアガン郡の中心都市ベ・コモより南西に 54 キロ離れた場所にあるイヌーの居留地］近郊の内陸部で生まれたジョゼフィーヌ・バコンは、最も重要なイヌー作家である。彼女はイヌー＝アイムン語で育てられ、その後フランス語の先住民寄宿舎学校に通った。彼女の作品はすべて、フランス語とイヌー＝アイムン語のバイリンガル版として出版されている。2018 年よりケベック芸術文芸委員名誉勲章（Compagne de l’Ordre des arts et des lettres du Québec）に叙せられているバコンは、これまで三冊の詩集、すなわち『メッセージ・バトン *Bâtons à message / Tshissinuashitakana* 』(2009)、『ツンドラの中の一杯のお茶 *Un thé dans la toundra / Nipishapui nete mushuat* 』(2013) そして『どこかに *Uiesh / Quelque part* 』(2018) を発表している。首尾一貫したまとまりをもつこれらの作品はすべてメモワール・ダンクリエから出版されている。ケベックの詩人ジョゼ・アクラン José Aquelin との詩のやりとりのなかで、バコンはこう書いている。

私の骨が疼く
言葉の欠乏に震えるため
痛みが凍りつく
話すこともできないまま
昨日を思い出せないと
私が夢見るのはただ一つの物語
過つことなく口述するような
実人生のまるごとを
お前は私を見ない
お前は私を理解しない
お前は私の言うことを聞かない
お前は私に話さない
お前は私の「大地」の征服者としてここに存在する

お前は私を私の「大地」に幽閉する
お前は私から私のアイデンティティを奪う
お前は私から私の領土を奪う
お前はお前の作った保留地に私を鎖で縛りつける
お前は私の精神の支配者になることを望んでいる
私は誰？
お前は私を知らない(Acquelin et Bacon, 2011, p. 10).

彼女の作品は、ケベック文化との対話であると同時に、自分たちの領土ヌツィミット(Nutshimit）と結びついた自言語の意味を見出すための、個人的で私的な意志表明たらんとしている。彼女の初期の詩集は、古来より伝わるイヌーの経験的知識が持つ力を余すところなく呼び覚ます。一方最新の作品では、老いること、今日では最年長者の一人とみなされていること、そしてその地位にあることで彼女が感じる狼狽について省察がなされている。彼女は『どこかに』の中でこう書いている。

今日私は人生のどこかに存在している。
私は年長者の仲間入りをしている。私は口碑を伝える詩人となりたい、真の放浪民、古老たちのように語りたい。
私はヌツィミット、大地を歩いたことがない(Bacon, 2018, p. 5)。

メストコショは海外で称賛され、バコンはその詩的深みによって名を馳せた。一方、1987 年にウアシャット（Uashat）［ケベック州コート＝ノール地域のセット＝リヴィエール郡に存在するイヌーの居留地］に生まれたナオミ・フォンテーヌは、モニク・デュラン Monique Durand によると、2011 年に出版された小説『キュエスィパン *Kuessipan*』［Kuessipan はイヌーの言葉で「君に « à toi »」とか「君の番だ« à ton tour »」を意味する］によって、ケベック文学に「小さな地震« petit séisme » (Durand, 2011, p. A4)」を引き起こした。新たなコーパスの登場を告げるこの小説が発表されたとき、フォンテーヌはまだ 23 歳であった。彼女の控えめで、とぎれとぎれで、様式的に不統一で、飾り気のないエクリチュールは、内部から簡潔さをもって、保留地内での生活と、北方の領土における回復への希望とを打ち明けている。ケベックの先住民の作品が、彼女の小説ほどの大きな成功を収めたことはかつてなかった。その文学的価値は各方面から称賛されている。アカデミー・フランセーズの会員であるダニー・ラフェリエール Dany Laferrière はこう書いている。「これは狩猟者の本です。その狩猟者が心臓のど真ん中を射抜くために獲物を凝視する必要はありません。私の心臓のど

真ん中を[32]」。この作品にもっとも顕著な特徴の一つは写実主義に対する作者の自制である。その自制のため、フォンテーヌは同胞たちが体験している問題のすべてを読者に打ち明けることを拒んでいる。彼女はこう書いている。「もちろん私は嘘をつきましたし、汚いものには白い覆いを被せました(Fontaine, 2011, p. 11)」。この小説は、一連の断片からなっていて（「世界」、「保留地」、「領土」、「同胞たち」の四部にまとめられている）、虚構とドキュメンタリー、そして自伝のあいだを揺れ動く先住民作品の形式的特徴を有している。彼女の作品を読んだ批評家たちはそろって、未知の領域に踏み込んだという印象を強調している。フォンテーヌは、社会的であると同時に、アンティミスム[日常的で身近な題材を親しみ深くなごやかな雰囲気で描く]的で政治的でもある文学に名を連ねている。彼女の言葉は控えめであるが、植民地主義に対しては効果的である。「痛いけど私はまだ何も言っていない。私は誰についても話していない。あえてそうしない(Fontaine, 2011, p. 9)」。この小説の成功により、ナオミ・フォンテーヌはケベックや海外におけるメディアの寵児となったが、そのあまりの反響の大きさから、彼女はコミュニティーの教師となって仲間に奉仕するために一時的に引退することを選択した。

1991 年にペッサミットで生まれた（そしてフランス語で教育を受けた）ナタシャ・カナペ＝フォンテーヌは他の作家とは別の台帳に記載される。活動家かつ詩人として、彼女は大規模な公共集会や北米先住民による反対運動「アイドル・ノー・モア *Idle No More*（空転している場合じゃない）」に参加している［2012 年 12 月より開始された、カナダのファースト・ネーションズによる抗議運動。ハーパー政権が採択し、議会によって可決された「C-45 法」への反動として展開された］。その活動や、著作、インタビューなどを通じて、彼女は資源の搾取や植民地主義を告発する。彼女はそれをフェミニズム的なアプローチによって行うのであるが、その中で女性の身体と言説とが政治的な役割を演じている。「私は女性＝領土である」と彼女は述べる[33]。『私の魂に土足で踏み入るな *N'entre pas dans mon âme avec tes chaussures*』(2012)や『アスィ宣言 *Manifeste Assi*』(2014)［「アスィ Assi」とはイヌーの言葉で「大地」を意味する］といった選集のタイトルは彼女のこうした政治参加を証言するものである。

最後に、1986 年にサグネ―ラック＝サン＝ジャン地域（Saguenay—Lac-Saint-Jean）［ケベック州の地方行政区の 1 つ。セントローレンス川の北に位置する］のマストイヤッシュ

---

[32] ナオミ・フォンテーヌの小説の表紙に添えるために出版社メモワール・ダンクリエが選んだフレーズ。こうすることでメモワール・ダンクリエは、（Dany Laferrière が作家として名を成した）「移住するエクリチュール« écritures migrantes »」とイヌー文学のつながりをはっきりと示して見せた。

[33] 特に 2016 年に *La fabrique culturelle* によって製作された美しい映像作品の中で：https://www.lafabriqueculturelle.tv/capsules/6552/natasha-kanape-fontaine-femme-territoire, consulté le 31 juillet 2019.

（Mashteuiatsh）のコミュニティーに生まれたマリ＝アンドレ・ギル Marie-Andrée Gill であるが、彼女はイヌーの作家たちの間で独自の活動を繰り広げている。彼女の活動はケベック文化、イヌー文化、そして大衆文化を広く参照している。彼女は、それまで集団的記憶やアイデンティティ、そして政治的な権利要求を特徴としていた文学に、個人主義的で、私的で、有性の（sexuée）声を持ち込んだ。ギルはイヌー文化の諸要素を作品内に取り入れるが、それはしばしば、イヌー文化への帰属を主張すると同時にそこから離脱する皮肉めいた動きの中においてである。以下の詩はそれをよく表している。

ウアシャットについて君には何も話していない　予感
海藻　灰色の鳥たち カクナのほとりの
子守歌と　その笑い　モンレアル
マストイヤッシュの墓地
そしてコンクリート製のティピー［tipi 北米先住民の住居。本来は獣皮製］　君には何も話していない
私たちにだけ通じる[à coucher dehors 発音しにくい・覚えにくい]囁きのなかで (Gill, 2012, p. 51)

彼女は自分の作品をケベック文学ともイヌー文学ともみなしている。批評家たちの称賛を集めた彼女の三冊の選集『ぽっかりあいた *Béante*』(2012)、『道をひらく *Frayer*』(2015) そして『外を暖める *Chauffer le dehors*』(2019) はどれも（ほとんどのイヌー作品を出版している）メモワール・ダンクリエではなく、ラ・ププラード（La Peuplade）から出版されているが、そのことが持つ意味は小さくはない。

アヌ・アンタン・カペシュの政治的発言からリタ・メストコショ、ジョゼフィーヌ・バコン、ナオミ・フォンテーヌ、ナタシャ・カナペ・フォンテーヌ、そしてマリ＝アンドレ・ギルの脱構築されたキッチュに至るまで、女性の声のみで構成されたイヌー文学は、諸言語と諸文化の境界で、見事な一貫性をもつ詩的系統を描いている。イヌイット文学とは対照的に、イヌー文学はケベック文学とその諸機関との親密な関係を保っている。イヌー文学もイヌイット文学と同様、新たなタイプの発言、脱植民地化に向かう歩み、そして文学の新たな用法を示しているが、その用法は重要な方法論的問題を提起してもいる。

文学的事実についての歴史的再解釈

イヌー文学とヌナヴィクのイヌイット文学の出現は、ケベックの文学（la littérature au Québec）に批評と編集の転換を引き起こした。長いあいだ沈黙状態に置かれていたイヌーとイヌイットは、今や文化的現代性（actualité culturelle）の中心に位置し、脱植民地を唱える彼らの声は政治的な効力を発揮している。彼らは世界的な、とりわけ北方で盛んに行われている運動の参加者であるが、その運動の中で先住民の作家たちは、自分たちを取り囲む事物に対する見方と観点を執筆と出版を通じて世に伝え、そうすることで従来とは異なる文学の用法を提唱しようと決意している。

何世紀ものあいだ、「インディアン」と「エスキモー」のイメージはステレオタイプ化されたネガティブな形で広く流布されてきた。しかし今日では、先住民のコミュニティーからついに届きはじめた一つ一つの声に耳を傾けることで、私たちは、これらのコミュニティーについての理解を深め、これまでの否定的な表象を覆す可能性を有している。私たちは今まで、探検家や旅行者、宣教師や民族学者に代弁させることで、彼らの声やイマージュをコントロールしてきた。そんな時代はもう終わったのである。

先住民たちによって書かれた作品が歴史を作るのはその数によってではない。先住民たちの作品の出現により、それが置かれる象徴システムの構造そのものが置き換わることで歴史が作られるのである。先住民たちの作品は長いあいだ無視されてきた。彼らの言葉が世界を—その美しさを、その複雑性を、その凶暴さを、その希望を—語り伝えなければならないという焦燥に駆られているとしても、また彼らの言葉が時に告発し、語り、そして保護して伝えるための手段を模索しているとしても、それは当然のことなのである。

先住民文学の歴史的出現には大きな価値があり、私たちはそれに注意を向ける必要がある。先住民文学は、文学とその解釈に対する私たち自身の関係も変化させる。通常私たちがテクストや文化を分析するために用いている方法は、先住民の作品を理解するためにはしばしば不十分であるように感じられる[34]。先住民の作品は、文学上の分野について、文化史について、文学の用法とその機能について、さらにその政治的で自民族中心主義的な前提について、私たちに何を伝えているのであろうか。先住民の作品を読み、それらを紹介するためにはどのような倫理的慎重さが求められるのか。先住民の作品は、植民地的なのか、それともポストコロニアル的、あるいは脱植民地的なのか。口承の貢献、領土と時間との親密な関係、暴力とトラウマの表象などをどのように考慮すべきか。世界を説明するうえで「理論« théorie »」と同等の発見的価値を「物語« récit »」が持ちうるということをどのように認められるのか。証言、

[34] この点についてフランス語で書かれたものとして *Nous sommes des histoires. Réflexions sur la littérature autochtone* (Jeannotte, Lamy et St-Amand, 2018) が挙げられる

伝記、断片、「癒し« guérison »」と執筆すること、出版すること、読むこと、解釈することといった社会的行動をどのように両立させるのか。

こうした疑問のほとんどについて、今日もまだ答えは出ていない。とはいうものの、こうした疑問の存在そのものが、作家モニク・デュランの表現を借りるのであれば、先住民文学の出現が「小さな地震」を引き起こし、文学的事実についての再解釈を促していることを私たちに伝えている。イヌー、イヌイット、クリー（crie）、サミ（sâme）、そしてアイヌなどの文学を理解するためには、これらの作品に触れることで、わたしたちが世界、他者、自然、そして文化と結んでいる特定の関係そのものに変化が生じていないかを自問する訓練を行う必要があるだろう。つまりここで問題とされているのは、不安定で、断片的で、急進的で、グローバルな現象なのであり、それによって私たちの視線は文学と文化の機能、用法、解釈を巡る問題の中心へと運ばれるのである。

先住民文学の出現はそれゆえ、新しい歴史の幕開けを告げると同時に、すべての文化の作品の再解釈についての省察を可能とするような批評の現場を切り開いたのだといえるだろう。先住民文学が提示する問題はそれほどまでに普遍的なものなのである。

Bibliographie

Acquelin, José et Joséphine Bacon (2011) *Nous sommes tous des sauvages.* Montréal, Mémoire d'encrier, coll. « Chronique ».

Bacon, Joséphine (2009) *Bâtons à message / Tshissinuashitakana.* Montréal, Mémoire d'encrier, coll. « Poésie ».

---- (2013) *Un thé dans la toundra / Nipishapui nete mushuat*. Montréal, Mémoire d'encrier.

---- (2018) *Ueish, quelque part*. Montréal, Mémoire d'encrier.

Chartier, Daniel (2005) « "Au-delà, il n'y a plus rien, plus rien que l'immensité désolée." Problématiques de l'histoire de la représentation des Inuits, des récits des premiers explorateurs aux œuvres cinématographiques », *International Journal of Canadian Studies/Revue internationale d'études canadiennes*, no 31, « Le Canada et l'Asie », pp. 177-196.

Chartier, Daniel (2017a) « "Pan-Inuit" Written Heritage. Institutions, Goals, Projects, Perspectives », dans Robert C. Thomsen and Lill Rastad Bjørst (dir.), *Heritage and Change in the Arctic. Resources for the Present, and the Future*, Aalborg, Aalborg University Press, pp. 41-67.

Chartier, Daniel (2017b) « La réception critique des littératures autochtones. *Kuessipan* de Naomi Fontaine », dans Gilles Dupuis et Klaus-Dieter Ertler (dir.), *À la carte. Le roman québécois (2010-2015)*, Frankfurt am Main, Peter Lang, pp. 167-184.

Chartier, Daniel et Nelly Duvicq (2014) « Un aperçu de la littérature inuite du Nunavik », *Zinc*, no 33, «Spécial Nord», pp. 57-69.

Delâge, Denys (1991 [1982]) *Le pays renversé. Amérindiens et Européens en Amérique du Nord-Est. 1600-1664*. Montréal, Boréal.

Deleuze, Gilles et Félix Guattari (1975) *Kafka. Pour une littérature mineure*. Paris, Éditions de Minuit, coll. « Critique ».

Durand, Monique (2011) « Carnets du Nord (7) — Prise de parole », *Le Devoir*, samedi 6 août 2011, p. A1.

Duvicq, Nelly (2019) *Histoire de la littérature inuite du Nunavik*. Québec, Presses de l'Université du Québec, coll. « Droit au pôle ».

Fontaine, Naomi (2011) *Kuessipan*. Montréal, Mémoire d'encrier.

Gagnon, Alain-G. et Guy Rocher (dir.) (2002) *Regard sur la Convention de la Baie-James et du Nord québécois*. Montréal, Québec/Amérique.

Gill, Marie-Andrée (2012) *Béante*. Chicoutimi, La Peuplade.

---- (2015) *Frayer*. Chicoutimi, La Peuplade.

---- (2019) *Chauffer le dehors*. Chicoutimi, La Peuplade.

Hamelin, Louis-Edmond (1996) *Écho des pays froids*. Sainte-Foy, Presses de l'Université Laval.

---- (2014) *La nordicité du Québec*. Québec, Presses de l'Université du Québec.

Jeannotte, Hélène, Jonathan Lamy et Isabelle St-Amand (2018) *Nous sommes des histoires. Réflexions sur la littérature autochtone*. Montréal, Mémoire d'encrier.

Kanapé Fontaine, Natasha (2012) *N'entre pas dans mon âme avec tes chaussures*. Montréal, Mémoire d'encrier, coll. « Poésie ».

---- (2014) *Manifeste Assi*. Montréal, Mémoire d'encrier, coll. « Poésie ».

Kapesh, An Antane (1976) *Je suis une maudite Sauvagesse / Eukuan Nin Matshimanitu Innu-Ishkueu*. Montréal, Leméac.

---- (1979) *Qu'as-tu fait de mon pays?* [s.l.], Les éditions impossibles.

---- (1982) *Je suis une maudite Sauvagesse*. Paris, Éditions des Femmes.

Martin, Keavy (2012) *Stories in a New Skin. Approaches to Inuit Literature in Nunavut*. Winnipeg, University of Manitoba Press, coll. « Contemporary Studies on the North ».

Mestokosho, Rita (1995) *Eshi uapataman nukum. Recueil de poèmes montagnais.* Mashteuiatsh, Piekuakami.

Mongeon-Bourbonnais, Clara (2014) « La figure du *Qallunaat* : Zebedee Nungak et la prise de parole inuit », Montréal, Université du Québec à Montréal.

Nungak, Zebedee (2019 [2017]) *Contre le colonialisme dopé aux stéroïdes. Le combat des Inuit du Québec pour leurs terres ancestrales*. Montréal, Boréal, coll. « Essai ».

Onfray, Michel (2002) *Esthétique du Pôle Nord*. Paris, Grasset.

Pélouas, Anne (2015) *Les Inuits, résistants!* Boulogne-Billancourt, HD Ateliers Henry Dougier, coll. « Lignes de vie d'un peuple ».

Premat, Christophe et Françoise Sule, ([s.d.]) « Le défi autochtone : le combat de Rita Mestokosho pour la minorité innue au Québec », Stockholm.

Qumaq, Taamusi (1991) *Inuit uqausillaringit / Les véritables mots inuit. Un dictionnaire des définitions en inuktitut du Nunavik (Québec arctique)*. Montréal et Inukjuak, Institut culturel Avataq et Québec, Association Inuksiutiit Katimajiit.

Qumaq, Taamusi (2009) *Je veux que les Inuit soient libres de nouveau. Autobiographie (1914-1993)*. Québec, Presses de l'Université du Québec, coll. « Jardin de givre ».

Uitangak, Johnny (2013) *History of Puvirnituq*. Inédit.

Vachon, André (1968) « Avant les *Anciens Canadiens* », *Études françaises*, vol. 4, n° 3, pp. 249-250.

---- (1968) *Éloquence indienne*. Ottawa, Fides, coll. « Classiques canadiens ».

Watt-Cloutier, Sheila (2019 [2015]) *Le droit au froid*. Montréal, Écosociété.